

北海道リンゴ栽培のために

夫節貝細

第1表 北海道の作物の収益性 (昭和36年)

作物	反当純収益	1時間労働当り	
		家族労働	報酬
米	11,816	円	178
小麦	3,470	円	173
裸麦	1,251	円	118
一ル麦	2,013	円	91
種馬鈴薯	9,115	円	178
一般馬鈴薯	2,341	円	119
だいづき	4,969	円	202
いんげんまめ	7,574	円	309
えんどう	5,471	円	284
りんご	1,774	円	121
とうもろこし	27,652	円	305
あまご	△ 1,933	円	44
除虫菊	△ 315	円	52
はっかい	6,777	円	187
んさい	4,203	円	84
な	1,478	円	82
な	427	円	78

のは経済の原則である

が、農業の場合それに加えるに「その土地で行なうには」という条件がついてくる。

今北海道のりんご、長野のりんごではどちらが儲かるかということには必ずしも意味がない。なぜなら長野でりんごを作ることは北海道で作るより儲るとしたところ、長野ではりんごより以外にその土地でできるさらに儲るものがあればりんごは作られないことになる。

ところで、北海道で作られる農作物のうち、農林省が調査した十七作物中では、反当りおよび労働一時間当りでも、りんごはもっとも収益の高いものとなっている。

もっとも北海道の広大な地域の中で、環境条件を考えないで作物間の収益を比較するのは当を得ないが、北海道のりんごの収益は決して低くないといえる。

ここで同じ道内において地域別の収益の状態をみると第二表のとおりである。

すなわち七飯の場合反当り所得が多いのは、一箱当りの単価が非常に高いためであり、ここではゴールドデンの多いためであり

品種構成の差が非常に大きな意味をもっていることがわかる。余市以北では北に行くほど反当り所得は少ないが一時間当り所得

第2表 本道りんご農家の経営状態

(昭和36年道農務部)

	別 道 別			
	七 飯	余 市	江 部 乙	上 湧 別
反当 箱 数	119	202	115	92
1箱 当 価 格	823	441	535	517
反当 粗 収 入	98,500	88,977	61,745	53,220
反当 所 経 費	98,500	88,977	61,745	53,220
反当 所 経 費	52,050	35,603	26,340	26,560
反当 労 働 時 間	46,450	53,374	35,405	26,660
1時間当り所得	281	370	207	203
経営全体での1人当り所得	197	133	149	145
経営面積りんご(反)	130,350	385,218	269,652	244,900
その他を含む計(反)	8	27	20	15
その他を含む計(反)	16	46	37	67

ではむしろ高いくらいであり、経営全体からの一人当り所得は、七飯では反収は高いにかかわらず経営面積が少なかったため少ないし、反収必ずしも多くなるとも北の農家はむしろ多くなっている。これは地代の安いところで労働生産性を上げて経営面積を多くもつことが所得を多くすることを示すものである。

二 北海道りんごの競争力は弱くない

北海道のりんごの収益性が他作物に比し高いとしても、ここで問題なのは北海道は現在りんごの生産地であると同時に大きな消費地でもあるため、この収益性がそれによって支えられているのではないかということである。

本道のりんごが産業として発展するためには、飽くまでも中央市場で他県産のものに競争できるかという点にかかっている。地元消費で他県産のものの輸送販売の経費分の差額で収益を保とうという考えでは産業としての発展は望めない。

狭い道内市場を相手にしている限りでは生産者の気には、同業者が多くなれば自分たちの収益が減るから困るといった程度の考えから抜けないのでないかと思われる。

ところで他県との競争力を考えてみよう。生産費を比べると反当りにおいても一〇〇ギ当りにしても本道のものが安い。すなわちコストが低いことは一つの強みである。

次に労働一時間当りの収益の高いことが強みである。しかし反当りの収益はもっとも

第3表 リんごの産地別生産費と収益

(昭和36年農林省)

産地	反当	100kg当	反当	労働	1時	反当
	生産費	生産費	純収益	取	り益	量
北海道	26,588	1,083	27,652	192	2,457	
青森	46,503	1,544	36,630	79	3,012	
長野	52,333	1,475	35,598	68	3,548	

も低い。これは販売単価が安いことによりも収量の少ないことが原因している。もちろん反収を上げることにも必要であるが、反当り収益が劣っても競争力は必ずしも関係ない。反収が少なければ経営面積を多くも

つことであり、現在でも北海道では経営面積は大きい方であり、それは次の強みであり、さらに規模拡大をはかるにも地代が安いことは大きな強みである。

現在においても経営規模の大きいことが経営的に有効であることは明らかであり、私は青森県において農林中金の依託で行なった調査からも、その間の事情が明らかである。

経営規模の拡大をはかるにしても青森県では一反歩一五万円もする。もっとも良いところは三十万円もするが、今平均の一五万円としても大へんなものであり、金利年六分としても九、〇〇〇円になるのであり、それだけ生産費へのはねかえりが大きい。農業構造の改善とは本来この経営の零細性を改めることであるが、現在いづくくして行ないえず、政府の施策も土地基盤の整備、大型機械の導入、主産地形成などにすぎ

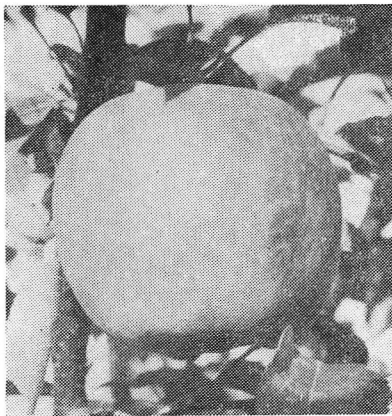
第4表 他産業従事者の収入に匹敵する面積試算

区分	収入
北海道りんご反当報酬	42,226円
青森りんご反当報酬	57,178
全国平均1人年間現金給与	319,512
北海道りんごで④に相当する面積	7.6反
青森りんごで④に相当する面積	5.9
北海道の水で④に相当する面積	11.9

ず、農業近代化の一助にはなるであろうが肝心の土地対策は何等とられていない。さらに経営面積の広いことで大きな強みとなるのは老齢樹品種などの更新に際してである。

今生産の落ちた老齢樹を有利な品種に更新しようとしても、面積が少なければ更新のため一時的にしろ収量を減ずることは非常に負担となりそれが行ない得ないことになる。

次にりんご作農業と他産業に従事した場合の収入の比較をしてみると第四表のとおりである。これは労働者の調査による全国一四、〇〇〇の事業所の一人当り年間現在給与と、農林省の生産費調査から、労働費(自家および雇傭)と、資本利子、地代を合せたものを反当り報酬とみたものから比較したのであるが、それによると青森県では一人当り五・八反、北海道では七・六反の面積を作ると事業所での所得と匹敵することになる。ところでこれはまったく他の労力を入れないで、しかも土地、資本は自分のものでそれによる収益を見つものことであるから現実これに可能にするには種



(レッドゴールド)

々の困難がある。

しかし、その可能性は北海道の方がより大きいのである。他に貯蔵力などについて有利性はいうまでもない。

三 本道りんご栽培の問題点

まず収量の安定性を計ることである。第五表を見て収量の不安定さが目につく、調査戸数が少ないことばかりでもないようである。

経営面積が大きく集約な労働を行なえないため、隔年結果をひきおこしていることがあられるかもしれないが栽培技術全体の問題として安定生産を望みたい。

次に本格的な品種更新の対策である。北海道の特性をいかすにはデリシャス系、レッドゴールドへの積極的な品種更新

第5表 反当収量の変動

地区	戸数	34年	35年	36年
		kg	kg	kg
北海道	5	2,380	1,487	2,457
青森	30	3,236	3,314	3,012
長野	10	—	5,121	3,548

農林省生産費調査より

である品種問題については別の機械にさらすのべたいが、北海道ではこれらの両品種を合せて、六・七割までもっていてもよいと思っている。新品種の中では陸奥を一割くらいつけてよいであろう。

高接病の問題も対策は明らかにされているのであるから、高接による更新を取り上げることも必要であろうし、老齢樹への間植も良いであろう。

面積の広い人では老齢の国光などは思い切つて伐つて、更新するような心構えがあつてもよいのではないか。

矮性砧木の実用化の研究がすすめられているので、その利用方法が明らかになると品種更新の手段として効果が高いであろうが、現在においても常に積極的に更新対策を行なつて欲しい。

新開植を行なう人にいいたい。他県のりんごの増植が減つたとしても気にすることはない。むしろ結構なことである。さらに一部に何々を植えれば反当り何拾萬円になるという言葉にまどわされてはならない。

果樹は今年植えて来年なるものではない、投機でないのである。

北方の果樹において、本来の味を出すという点からいっても府県に対抗しうるものはやはりりんごである。私はじっくりと自からの道をあゆむことを進めたい。

なお技術的には種々問題はあるがそれらは次の機会にゆずりたい。

(北海道立農試芸部 技師)